

ノートル=ダムの建築家

1. ジャン・ド・シエル

イヴ・ガレ (Yves Gallet)

ジャン・ド・シエルはノートル=ダムの歴史上もっとも重要な建築家のうちの一人だが、もっともよく知られていない建築家の一人でもある。シエル（セヌ=エ=マルヌ県）はパリ周辺の村落であることから、ゴージェ・ド・ムーランからロベール・ド・リュザルシュ、ピエール・ド・モントルイユ、エティエンヌ・ド・ボヌーイまでの名の知られている 13 世紀の他の多くの建築家同様、ジャンはパリ地域の出身であったと考えられる。14 世紀初頭に当大聖堂の工匠であったジャン・ド・シエルも、間違いなくパリに縁のある人であっただろう。

ジャンについて我々が知っていることは、南袖廊の基礎にかつて見ることのできた刻印に要約されている。この刻印はヴィオレ=ル=デュックによって作り直されたのだが、その刻印には、建物のこの部分は 1258 年、ジャン・ド・シエルの存命中に着工されたと明言されているのである。つまり、「1257 年 2 月 12 日 [原注 : 1258 年]、これは石工ジャン・ド・シエルの存命中に、キリストの母を讃えて開始された (*anno domini mcclvii, mense februario, idus secundo, hoc fuit inventum christi genetricis honore kallensi lathomo vivente johanne magistro*) 』。

かつての歴史家たち例えばアンドレ・フェリビアン (1725 年)、フェルディナン・ド・ギレルミ (1855 年) そしてマルセル・オベールまでもが (1909 年)、南袖廊全体にわたってジャン・ド・シエルが建築家であったと考えた。しかし、ピエール・ド・モントルイユが 1265 年に工匠として言及されていることが 1912 年にアンリ・シュティンによって発見されてからは、歴史家たちは南袖廊の刻印をむしろ 1258 年か 1259 年のジャン・ド・シエル死後間もなく彼を記念するために彫られたのではないかと解釈し、南袖廊に先立って建てられた北袖廊に限ってこの工匠の作品と考えている。それでも、古い解釈は若干数の支持者を強く惹きつけている (Branner, 1967)。

どのような位置づけを与えられるにせよ、ジャン・ド・シエルは壮大なスケールのプロジェクトの功績者として讃えられねばならない。すなわちトランセプトの拡張と、ノートル=ダムの誉れの一つであるレイヨナン様式の両ファサードの設計。間もなく始まる修復作業は何よりもまずこの部分に関わるのであるから、修復はこの問いを改めて検討するよい機会となるだろう。

参考文献 :

André Félibien, *Entretiens sur les vies et sur les ouvrages des plus excellens peintres anciens et modernes, avec la vie des architectes*, Trévoux, t. 5, 1725, p. 228

Ferdinand de Guilhermy, *Itinéraire archéologique de Paris*, Paris, 1855, p. 25

Marcel Aubert, *La cathédrale Notre-Dame de Paris. Notice historique et archéologique*, Paris, 1909, p. 12-13

Henri Stein, « Pierre de Montereau et la cathédrale de Paris », *Mémoires de la Société nationale des Antiquaires de France*, 1912, p. 14–28

Robert Branner, *The Art Bulletin*, 1967, p. 397–402

オンライン公開日：2019年4月26日

(日本語訳 嶋崎礼)

2. ピエール・ド・モントルイユ

イヴ・ガレ (Yves Gallet)

ノートル=ダムのすべての建築家の中でも、ピエール・ド・モントルイユは知名度に恵まれている。彼のキャリアは豊富に記録されているといわなければならない。1212年に生まれてから、1239年にサン=ジェルマン=デ=プレで活動を開始し、サン=ドニ修道院の建設工事への参加(1247年)を経て、1267年3月17日に54歳で死去するまで。彼はまたコンフランに石切り場を所有し、カシャンに土地を持ち、ヴォヴェールにも持っていたということも知られている。17・18世紀の記述によれば、サン=ジェルマンにあった彼の墓石において、彼は直角定規とコンパスを携えた立ち姿で描かれていたという。疑いなく、同時代のランスのユーク・リベルジエと同様のものであっただろう。その墓碑銘では彼は「石工博士 (*doctor lathomorum*)」という肩書を付与されており、サン=ジェルマン修道院の修道士たちの間であたかも大学で最高学位を取得した知識人であるかのように話され、尊敬を集めていたであろうことを示している。モントルイユ家の他のメンバーも建築家であり、重要な地位に就いていた。彼の弟カヌーであるウッド(1289年死去)とその息子ラウルはいずれも1280-1290年代にサン=ドニとフィリップ四世美男王のために働いていた。17世紀にピエール・ド・モントルイユを再発見した著述家たちは彼の人物像の周囲に紛れもない神話を築き上げ、説得力のある議論をすることもなく、シテ宮のサント=シャペル(1243-1248年)の設計を彼に帰すに至った。

ノートル=ダムにおけるピエールの役割は、彼をパリ大聖堂の建築家と呼んでいる1265年の証書によって知られている。1896年からその存在が知られていたが1912年になってやっと正式に発表されたこの証書の発見により、彼は1258年から1259年にジャン・ド・シエルの後を継いだと推測された。しかし彼が設計した家屋をめぐる1260年の紛争調停書の中では、彼はノートル=ダムの建物の親方という肩書を付与されていない。いずれにせよ彼の活動期間は、南袖廊とその壮大なレイヨナン・ゴシック様式の薔薇窓、シュヴェ北西部の礼拝堂(1255-1265年頃)、それに恐らくポルト・ルージュ〔訳注：内陣北側第3ベイの礼拝堂に付属する、赤い扉板の玄関〕(1270年頃)などが建設された時期と重なっているに違いない。彼の作品においては前衛的なモチーフが統合され、より先鋭的な形やより精緻な建築への好みの変化を証言している。そこでは先行する数十年間に好まれたようなより彫塑的なコントラストを犠牲にして、構造の細さや繊細さが優先されている。これらすべての性質はピエール・ド・モントルイユにレイヨナン・ゴシック様式の偉大な建築家たちの中でも傑出した位置づけを与えている。たとえ南袖廊の薔薇窓がヴィオレ=ル=デュックによって著しく改変され、トランセプト全体とともに2019年4月15日の火災によって甚だしい被害を被ったとしても。

参考文献：

Jean de Launay, « Les artistes parisiens au Moyen Âge », *Revue de l'art chrétien*, 1896, p. 401

Henri Stein, « Pierre de Montreuil et la cathédrale de Paris », *Mémoires de la Société nationale des Antiquaires de France*, 1912, p. 14-28

En dernier lieu : Yves Gallet, « Pierre de Montreuil, architecte de la Sainte-Chapelle ? Généalogie d'une erreur », dans M. Angheben, P. Martin et É. Sparhubert, dir., *Regards croisés sur le monument médiéval. Mélanges offerts à Claude Andraut-Schmitt*, Brepols, 2018, p. 181-197.

オンライン公開日：2019年4月29日

(日本語訳 嶋崎礼)

3. ピエール・ド・シエル

イヴ・ガレ (Yves Gallet)

ピエール・ド・シエルの名は、ただちに13世紀半ばのノートル＝ダムの大建築家、ジャン・ド・シエルの名を思い起こさせる。紛れもない建築家一族（モントルイユ家、ヴァランフロワ家、デシャン家…）が出現したこの時代、彼らが同じ家系に属する2人の人物という可能性はある。しかしこのノートル＝ダムの2人の工匠を結びつける血縁の有無については何もわかっていない。1292年の謎めいた言及を除けば、ピエール・ド・シエルは1307年、フランス王フィリップ四世美男王の宮廷に工匠として参じ、王フィリップ三世の墓の「石を積み」、それをサン＝ドニ大修道院に運ぶために巨額の支払いを受け取った。1316年、彼はシャルトル大聖堂における建築の鑑定に参加している。そこではピエールは「パリ市とパリ周辺地域の親方」という肩書を与えられており、同時にノートル＝ダムの工匠でもあるとされているが、いつからそうなのかは明言されていない。知られている直近のピエール・ド・シエルの前任者は、1267年に死去したピエール・ド・モントルイユである。後継者はジャン・ラヴィで、遅くとも1325-1326年、恐らく1320年頃に着任した。したがってピエール・ド・シエルは、シュヴェエの礼拝堂の建設とそれに伴う飛梁やシュヴェエのトリビューンのレイヨナン・ゴシック様式による改変が終了した時期にノートル＝ダムで働いていたということだ。たぐいまれな上品さで大聖堂の線を描きなおし、ストラスブールに保管されているパリ大聖堂のシュヴェエの平面図が証言するようにヨーロッパ全域から関心の目を寄せられた、この現場の工匠は彼だったのだろうか？ パリ大聖堂の参事会に所属していたラルシャンのサン＝マチュラン（セヌ＝エ＝マルヌ県）の聖母礼拝堂も、ピエール・ド・シエルの作品ではないかと言われてきた。同様に、ノートル＝ダムのシュヴェエの礼拝堂と非常によく似ているサン＝ドニの外陣北側の6つの礼拝堂（1320-1324年）の建設も彼に帰された。

参考文献：

Victor Mortet, « L'expertise de la cathédrale de Chartres en 1316 », *Congrès archéologique de France*, 1900, p. 308-329

Alain Erlande-Brandenburg, *Le roi est mort*, Paris, 1975, p. 171

Jacques Henriot, « La chapelle de la Vierge de Saint-Mathurin de Larchant, une oeuvre de Pierre de Chelles ? », *Bulletin Monumental*, 1978, p. 35-47

Michael Davis, « Splendor and Peril: The Cathedral of Paris, 1290-1350 », *The Art Bulletin*, 1998, p. 34-66.

オンライン公開日：2019年4月29日

(日本語訳 嶋崎礼)

4. ウージェーヌ・ヴィオレ＝ル＝デュックの「修復」の記事

ベレニス・ゴシュアン (Bérénice Gaussuin)

「建物の屋根裏を新しく作り直すということになると、建築家はそれを鉄で建てることを忌み嫌う。なぜなら中世の工匠たちは鉄の小屋組を作らなかったからだ。しかし我々の考えではそれは間違っている。というのも鉄の小屋組は、古いモニュメントにおいて幾度となく致命的であった火災の恐ろしい機会を回避できるだろうから」。ノートル＝ダム・ド・パリの境遇を予言したようなこの文言は、1866年にウージェーヌ・ヴィオレ＝ル＝デュックによって発表された「修復」の記事からの抜粋である。20年以上にわたり数多くの建物の修復現場に携わった後、彼はこの年『11世紀から16世紀までのフランス建築の論理的事典 [訳注：『中世建築事典』とも通称される]』の第8巻「修復」の項目を含む一冊を出版する。この事典は彼がその様々な活動と同時並行で書き上げ、1854年から1868年にかけて出版された、10巻に及ぶ著作である。

冒頭の言葉はよく知られている。「この言葉も、このこと自体も、現代的なものだ。建物を修復するとは、維持管理したり修繕したり作り直したりすることではなく、かつてどの時点にも存在しなかったかもしれない完全な状態に建物を復帰させることなのだ」。ヴィオレ＝ル＝デュックは建築家であり、したがって修復をまったく建築計画として考えていた。しかしそれは彼にとって、既存の建物に向かって分別のない自由を行使するというものではなかった。続く20ページの記事の中で、ヴィオレ＝ル＝デュックは長々と彼の先駆者たちが過去の建物と続けてきた関係の歴史を説明し、自身の冒頭の言葉に答えている。彼は「古代ほどにも修復の意識を持ち合わせておらず、そこから程遠かった」アジア、古代ローマ、中世について語っている。「12世紀の建物の破損した柱頭の代わりとして設置されるのは13、14、あるいは15世紀の柱頭であった」。ヴィオレ＝ル＝デュックはこうして、先行する時代から自身の修復実践を区別するが、だからといって過去の作品をそのまま復元することはよしとしない。「建物の中にあるあらゆるものの複製品を再生産することにも、もともとあった形を後の時代の形で置き換えてしまおうとすることと同じくらいの危険性があるといえるだろう」。

この記事全体を読むと、対象の建物の子細な調査から始まる、修復の複雑で異種混合的なアプローチが明らかになる。ヴィオレ＝ル＝デュックは、今日では診断と呼ばれるようなものについて語っている。つまり、「各部分の年代と性質を間違いなく証明する」ためにその物質性にまでわたって建物の歴史を解明し、記述とスケッチによってそれを記録すること。こうした理解の段階が実行されると、修復家は、調査されるモニュメントの中で堆積したものに關連した、多くのジレンマに直面する。「もともとの状態を保っている部分と改変された部分とを修復するとなったとき、改変された部分を考慮しないで、乱された様式的統一性を回復するべきなのか、それとも後世の改変を含めすべてを完全に元通りに作り直すべきなのか？」ヴィオレ＝ル＝デュックは、彼を対象とした風刺画からは程遠く、この問いに節度とニュアンスをもって答えている。「二者のうち一方だけを採用することは危険をもたらしかねない、反対に必要なのはどちらの原則も絶対的なやり方では認めずに、個々の状況に即して行動することだ」。ヴィオレ＝ル＝デュックの言う個々の状況とは、その歴史やそこに蓄積した何世紀もの時間によって生じる、各建物に固有の特性のことである。彼は、どの過程も常に同じ意味を持つことはないということを理解させるために、いくつかの事例を示している。例えば当初雨水の排水システムのない屋根で設計された12世紀の建物で、13世紀にそのシステムを付与された場合。これは改善であり、建築家は修復の際にそれを残すだろう。一方、ヴォールトが取り壊されて後世の時代に作り直された12世紀の教会堂で、この第2のヴォールトが崩壊の

危機にある場合、建築家は「それぞれの建物をそれにふさわしい様式で修復する」ために、当初の状態に復元するだろう。ただし、この第 2 のヴォールトが窓の開口など「価値の高い」ハイブリッドな構造をなす改変につながっている場合、様式の統一が回復されることはないだろう。

ヴィオレ＝ル＝デュックは多くの状況に対してニュアンスに富んだ検討をし、とりわけ古い建物に暖房を設置するなどして現代的な快適さを与えられないかと検討した。「例えば、もし彼〔建築家〕が中世にはこのような暖房システムを宗教建築に設置していなかったと言って暖房設備に同意しないなら、彼は考古学によって信徒が風邪を引くことを強いているのであり、愚かである」。同様に、「構造の必要性からであれ、破損した作品を補完するためであれ」新しい部分を新築することは、彼の提案する一つの選択肢である。そこでも、彼は建物の個々のケースに押し付けられるような絶対的な考えを打ち出すことなく、かなり慎重な態度を見せている。「したがって、足りない部分を補う際には熟慮しなければならない」。ただ、絶対的な原則が「愚行につながるかもしれない」とはいえ、ヴィオレ＝ル＝デュックはそれでも強い意見を述べている。「それは、取り去られた部分はすべてより良い材料、より力強いあるいはより完全な方法で置き換えてはならない、ということだ」。その目的は、修復された建物が「これまで過ぎ去っていった時間より長い期間にわたって」これからも存在し続けることなのだから。

参考文献：

E. E. Viollet-le-Duc, *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle*, Paris, B. Bance, 1866, vol. 8/10

オンライン公開日：2019年5月3日

(日本語訳 嶋崎礼)